

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	下山 史隆
論文題目	根源と生成の循環：ヘルマン・コーヘンの理論哲学の形成		
（論文内容の要旨） 本論文は、七章構成のもとで、いわゆるマールブルク学派の創始者であるヘルマン・コーヘンの思想形成の過程とその最終形態を、根源と生成の循環という視座のもとで捉えたものである。主として第一章から第五章の前半までが思想の形成過程を、第五章後半から第七章でコーヘンの成熟期の著作『無限小法の原理とその歴史』、『純粹認識の論理学』に焦点が置かれている。くわえて、序章で本論文の目的および方法があらかじめ説明され、さらに終章において、本論文の理論的意義と今後の課題が述べられている。 序章では、コーヘンをめぐる研究状況が概括され、先行研究が心理主義的な初期とそれ以降を断絶と捉える見方と連続と捉える見方へと整理され、「事実と規範の循環構造」という視点でコーヘンの思想を連続的に捉える立場が示されている。また、現時点でコーヘンの思想を捉えるうえで「マイナー哲学史」という視座が有効であることが示されている。マイナー哲学史とは、申請者によれば、メジャーな哲学史によって隠蔽されているもの、消し去られているものへの眼差しを大切にすることで見いだされてゆくものである。 第一章「最初期コーヘンの思想」では、初期コーヘンの原点にあるヘルバルトの心理主義と、その影響下で成立した、ラツァルスとシュタインタールの「民族心理学」との関係に照らして、コーヘンの初期思想が考察されている。またその際、トレンドレンブルクとヘルバルトの関係も視野に収められている。ここではコーヘンがラツァルスからとくに「凝縮」という概念を独自なかたちで継承したことが強調されている。 第二章「ヘルバルト主義者としてのコーヘン」では、コーヘンの『カントの経験理論』第一版、およびコーヘンの論考「トレンドレンブルクとクーノ・フィッシャーの論争について」にそくして、ヘルバルトの心理主義と民族心理学の視点がまだこの時点ではコーヘンによって引き継がれていたことが考察されている。その際コーヘンがヘルバルトの心理主義において受動的所与とされているものを統覚の能動的運動によって構成されたものと理解することで、のちの理論哲学の萌芽を示していることが確認されている。 第三章「超越論的方法」では、当時の唯物論論争とそれを終息させたとされるランゲの思想を丹念に紹介しつつ、コーヘンの著作『カントの倫理学の根拠づけ』にそくしてコーヘンによるランゲ批判が説明されている。ランゲは唯物論論争を終わらせることで自然科学と哲学の新たな関係を提示しつつも、身体を現象の原因としての物自			

体とした。この点をコーヘンは批判し、あくまで物自体を「限界概念」と位置づけることによって、自らの超越論的方法を決定的に整えた、と論じられている。

第四章「コーヘンと精神物理学」では、感覚と刺激の関係を数理的に捉えようとする、ヴェーバーからフェヒナーへと引き継がれた精神物理学への、ランゲとコーヘンの批判が主題的に論じられている。精神物理学が感覚をあくまで外的な量とすることを前提にしている点を批判して、コーヘンは無限小という思惟の契機を対置した。これによって、無限小を、有限な対象を連続的かつ必然的なものとして産出する方法的根源としたと説明されている。

第五章「「無限小法」の意義」においては、カントにおける「知覚の予料」をつうじた感性と悟性の媒介の問題を、無限小法を認識論的に読み替えることでその解決を基礎づけようとしたことが論じられる。とくに焦点があてられているのは、当時主流だった「極限法」へのコーヘンの批判である。これによって無限小法が自然科学的経験を超越論的に基礎づけるコーヘンの企図の中核に位置することが示されている。

第六章「コーヘンの経験理論」では、コーヘン『カントの経験理論』第二版、第三版にそくして、コーヘンが経験概念をどのように再定義し、第一版に残っていた心理主義的契機を徹底して排除することで、自らの体系哲学の基礎を形づくったのかが明らかにされている。コーヘンはカントの不徹底さを批判的に乗り越えて、経験概念を理性が自己を根拠づける動的な体系の内部へ導入したと論じられている。

第七章「コーヘンにおける根源の概念」では、コーヘン『純粹認識の論理学』の中心概念である「根源」に焦点があてられている。まずコーヘンの「根源概念」の先行研究が腑分けされ、続いて「根源」が「無」をつうじて対象を産出する論理過程が明らかにされ、さらに思惟法則、数学、数学的自然科学、方法論という四系列へと展開されてゆく理路が詳細に確認されている。

終章では、本論文の「総括」、その「理論的意義」、「哲学史的射程」、「今後の課題」について、そもそも哲学とはなにかという原理的な問いかけとともに、簡潔に述べられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文はまずもって、新カント派、マールブルク学派の創始者ヘルマン・コーヘンの思想の形成過程とその体系的完成までを丹念に跡づけた大部な研究として高く評価することができる。コーヘンの思想は、日本においては、大正時代から昭和初期にかけていち早く導入されていながら、戦後、本格的な研究は途絶えた状態が長く続いた。申請者は日本において新カント派再評価の機運を作り出している若手の代表であって、本論文はその流れのなかでの大きな成果の一つと呼べる。また、コーヘンについての最新の先行研究はもとより、コーヘンの出発点となったヘルバルトの心理学、コーヘンの師に相当するランゲのカント解釈をはじめ、コーヘンの周辺の思想家にも十分目配りをしている点でも、優れた研究と見なすことができる。

序章においては、1980年代以降の欧米における新カント派研究、とくにコーヘン研究について、現時点における主要なものが概括されている。初期のコーヘンと後期のコーヘンのあいだに断絶を見るか、連続を見るかで先行研究を大きく腑分けしたうえで、「事実と規範の循環構造」という初期から一貫したコーヘンの思想のうちに連続性を見て取る視点を提示していることが高く評価できる。また、「マイナー哲学史」という問題設定も、本論文でのその成否はともかく、とても興味深いものである。

第一章では、初期コーヘンの心理主義を理解するうえで、ヘルバルトの心理学を掘り起こすこととともに、その影響下で成立したラツァルスとシュタインタールの「民族心理学」に着目し、ラツァルスから「凝縮」という概念を、シュタインタールからはその言語論を、それぞれコーヘンが組み替えつつ継承していることを明らかにしているところに申請者の優れた視点をうかがうことができる。

第二章では、『カントの経験理論』第一版においてコーヘンがすでにヘルバルトの心理主義を克服しているとする通説に対して、コーヘンがこの時点ではなおヘルバルトの心理主義の影響下にあったことが、説得力をもって論じられている。その際、一方でこの第一版においてのちの『純粹認識の論理学』において明確になる「根源の循環」が先取りされていることも指摘されている。これは申請者がコーヘンの思想の体系的展開をきちんと繰り返しこんで考察できていることを明瞭に示している。

第三章では、『カントの倫理学の根拠づけ』にそくして、コーヘンにおいて「超越論的方法」がどのように成立していったかが、丁寧に跡づけられている。その際、その経緯がコーヘンの師に相当するランゲの思想の受容と批判という両面から浮き彫りにされている。とくに、「唯物論論争」を終わらせたと言われるランゲが身体を物自体としたことに対して『カントの経験理論』第一版においてすでにコーヘンが批判を提示していたこともあらためて確認されている。いずれにおいても申請者の着眼点の鋭さを見て取ることができる。

第四章では、コーヘンが理論的著作をほとんど残していない一見「空白期」が扱われているが、「精神物理学」といういまでは忘れられているに等しい潮流に注目し、それがたんなる空白期ではなく、その潮流への批判をつうじてコーヘンが「無限小の論理」へと移行してゆく理論的成熟期と位置づけられている。この章からは微分方程式も考察に組み込まれていて、数学に対する申請者の能力も示されている。

第五章では、コーヘンの成熟期の哲学についての考察がはじめられ、「無限小法」が純粋思惟の根源的原理として確立されてゆく過程が解明されている。その際申請者は、ランゲの依拠していた「極限法」への批判をつうじてコーヘンが「無限小」を対象の連続性を生み出す思惟の契機として位置づけたと捉えている。極限法批判による無限小法の確立という理解は、コーヘン思想の勘所を押さえたものと評することができる。

第六章では、『カントの経験理論』第二版と第三版にそくして、第一版に残っていた心理主義が排除され、コーヘン体系の基礎づけが果たされていることが論じられている。その際、物自体が「理念」として位置づけなおされ、それが科学的認識を新たな仮説と検証の循環へと突き動かすとされている。ここには、コーヘンの理論と具体的な科学的実践の結びつきに対する申請者の透徹した理解をうかがうことができる。

第七章では、『純粋認識の論理学』にそくして「根源」という概念が主題的に論じられている。本章は、第六章とともに、本論文の白眉と言える箇所である。ここでは、『純粋認識の論理学』の中心部で展開されている思惟法則、数学、数学的自然科学、方法論という難解な四系列が粘り強く考察されている。申請者の優れた思考力が如実にうかがわれる箇所である。

終章では、残された課題として、多くの指摘がなされているが、とくにコーヘンの『純粋意志の倫理学』と『純粋感情の美学』という他の二著作を組み込むことの必要性について十分申請者は自覚している。この点にも申請者の研究者としての真摯な姿勢が示されている。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和8年1月5日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降